

宇宙と異次元空間において、原子間距離から、微細構造定数により、逆関数には、ゼータ関数がこの逆関数において、原子から宇宙空間においてのノルムがホログラム空間で、接平面の曲平面の2次元射影空間のミンコフスキー空間がこのノルム空間の機構を表している。最小単位が逆関数により、無限空間を生み出す。この無限空間は、指数定理により、相加相乗平均の対数関数による、指数関数からの双曲点から、臨界値により勾配率が0の等加速度と等速度運動においての、双曲微分から、この接空間の曲率を求めると、開集合により、電子によるオーヴィタル雲が異次元空間をつくり出されている。

原子核における中間子論は、この原子とオーヴィタル雲を形成している、電子雲をゼータ関数と量子群を加群とする機構自体が、この中間子を形成している。原子関数のオーヴィタル雲が自身にエントロピー値を保有している。このエントロピー値が、ゼータ関数の開集合値をその同値類として、ゼータ関数と量子群を加群とするための仕組みを形づくるラプラス方程式それ自体が、原子核における中間子論を形成していると言える。

一般に言われているゼータ関数は、実軸 $Re = \frac{1}{2}$ に自明な零点が存在していることが、物理学を持ち出すと、この Re が均配力0となり、相対性理論による慣性質量と重力質量が同値といえる、慣性系が一定と同じことを言っている。 $Re = \frac{1}{2}$ は、非対称性理論を言っている。この値の領域は、遷移元素の光量子仮説から、ゼータ関数と量子群から、原子の固有エントロピー値を言っている。開集合から、リーマン予想と深リーマン予想を形成するサーストン多様体をこの開集合の値から、エネルギー安定性が言える。

まとめると、中間子論は、原子核における素粒子同士を結合させるエネルギー安定性のことで、この粒子は、ゼータ関数と量子群の演算子からラプラス方程式をつくり出す、大域的微分方程式の役割をする、初期関数を微分演算子とする、記号論が、この中間子論を形成している。湯川秀樹教授が、発見した中間子論は、数学の世界では、演算子における記号論と同値と言えるだろう。